

一般県道横芝山武線道路改良事業
埋蔵文化財調査報告書

— 横芝町 木戸台・町原古墳群、木戸台遺跡 —

平成 8 年 3 月

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

一般県道横芝山武線道路改良事業 埋蔵文化財調査報告書

— 横芝町 木戸台・町原古墳群、木戸台遺跡 —



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第284集として、千葉県土木部の一般県道横芝山武線道路改良事業に伴って実施した山武郡横芝町木戸台・町原古墳群、木戸台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、木戸台・町原古墳群で古墳2基が調査され、木戸台遺跡では縄文時代早期の土器が出土するなど、この地域の縄文時代及び古墳時代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また文化財の保護、普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成8年3月29日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村 好成

凡 例

- 1 本書は、千葉県土木部による一般県道横芝山武線道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。
木戸台・町原古墳群 千葉県山武郡横芝町木戸台字谷部田144-2ほか (408-010)
木戸台遺跡 山武郡横芝町中台字鳥井戸122-10ほか (408-011)
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、縄文時代遺物の事実記載を主任技師 高柳圭一が、それ以外は主任技師 萩原恭一が行った。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部道路建設課、千葉県山武土木事務所、横芝町教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、以下のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「多古」(N1-54-19-10-2)、「成東」(N1-54-19-11-1)
第2図 横芝町役場発行 1/2,500 地形図「横芝町4」、「横芝町5」
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成6年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

本文目次

I	はじめに	1
1	調査の経緯と経過	1
2	遺跡の位置と歴史的環境	2
II	木戸台・町原古墳群	5
1	遺跡の概要	6
2	旧石器時代	6
3	縄文時代	9
4	古墳時代	11
III	木戸台遺跡	14
1	遺跡の概要	15
2	縄文時代	15
3	古墳時代	28
IV	まとめ	30
1	木戸台・町原古墳群	30
2	木戸台遺跡	30

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図	3	第13図	SK 7・8・9・10・11・20・37 実測図	18
第2図	木戸台・町原古墳群、 木戸台遺跡周辺地形図	4	第14図	SK 7・8・9・10・11・20・37 断面図	19
第3図	木戸台・町原古墳群遺構配置図	5	第15図	SK12・13・14・15・16・17・18・19・21 実測図	20
第4図	旧石器時代遺物出土状況図	7	第16図	SK23・24・26・27・28・29・30・32・33 ・35・36実測図	22
第5図	旧石器時代遺物実測図	8	第17図	縄文土器拓影図(1)	23
第6図	炉穴実測図	10	第18図	縄文土器拓影図(2)	25
第7図	縄文時代遺物実測図	10	第19図	土製品・石製品実測図	27
第8図	古墳復原図	12	第20図	SK 1・SX 1実測図	28
第9図	4号墳墳丘断面図	13	第21図	古墳時代・奈良時代遺物実測図	29
第10図	古墳時代遺物実測図	13			
第11図	木戸台遺跡遺構配置図	14			
第12図	SK 2・3・4・5実測図	16			

表 目 次

第1表 旧石器時代遺物属性表…………… 9

写真図版目次

- | | |
|-------------------------------------|--|
| 図版1 木戸台・町原古墳群、木戸台遺跡
周辺航空写真 | —木戸台遺跡— |
| —木戸台・町原古墳群— | 図版9 遺跡全景、SK 1 |
| 図版2 遺跡全景航空写真、4号墳全景、
5号墳全景 | 図版10 SK 3、SK 2・4・5ほか、SK 7～11・20・
37ほか |
| 図版3 4号墳近景、4号墳調査状況（1）、
4号墳調査状況（2） | 図版11 SK13・14・32・33ほか、SK22・23ほか、
SK26・27 |
| 図版4 4号墳墳丘土層断面、同（北西部分）、
同（南東部分） | 図版12 SK28～31、SK 1・2ほか、SX 1 |
| 図版5 4号墳周溝（北西側）、4号墳周溝
（南東側）、5号墳周溝 | 図版13 縄文土器（1） |
| 図版6 SK 1、SK 2・3、旧石器時代遺物出土状況 | 図版14 縄文土器（2） |
| 図版7 旧石器時代遺物 | 図版15 縄文土器（3） |
| 図版8 縄文土器、縄文時代石器、古墳時代遺物 | 図版16 縄文土器（4） |
| | 図版17 土製品・石製品、古墳・奈良時代の遺物 |

I はじめに

1 調査の経過と経緯

一般県道横芝山武線は、横芝町内では蛇行箇所が多く、また路線幅も狭い道路である。千葉県土木部はこの両方の問題を解消するために、道路改良事業を計画した。用地内に所在する埋蔵文化財については、千葉県教育委員会との協議の結果、記録保存の措置がとられることになった。発掘調査は、財団法人千葉県文化財センターが千葉県土木部の委託を受け実施した。

各年度における期間、業務内容及び担当者は、以下のとおりである。

(1)平成5年度

〈発掘調査〉

—木戸台・町原古墳群—

調査期間：平成5年6月7日から8月31日

調査面積：調査対象面積 380㎡

確認調査 上層 —/380㎡ 下層 16㎡/380㎡

本調査 上層 380㎡ 下層 27㎡

発掘担当者：主任技師 永沼律朗

(2)平成7年度

〈発掘調査〉

—木戸台・町原古墳群—

調査期間：平成7年4月4日から4月14日

調査面積：調査対象面積 360㎡

確認調査 上層 36㎡/360㎡ 下層 8㎡/360㎡

本調査 上層 53㎡ 下層 0㎡

発掘担当者：主任技師 萩原恭一

—木戸台遺跡—

調査期間：平成7年4月10日から5月12日

調査面積：調査対象面積 600㎡

確認調査 上層 —/600㎡ 下層 12㎡/600㎡

本調査 上層 600㎡ 下層 0㎡

発掘担当者：主任技師 萩原恭一

〈整理作業〉

—木戸台・町原古墳群、木戸台遺跡—

整理期間：平成7年5月15日から7月31日

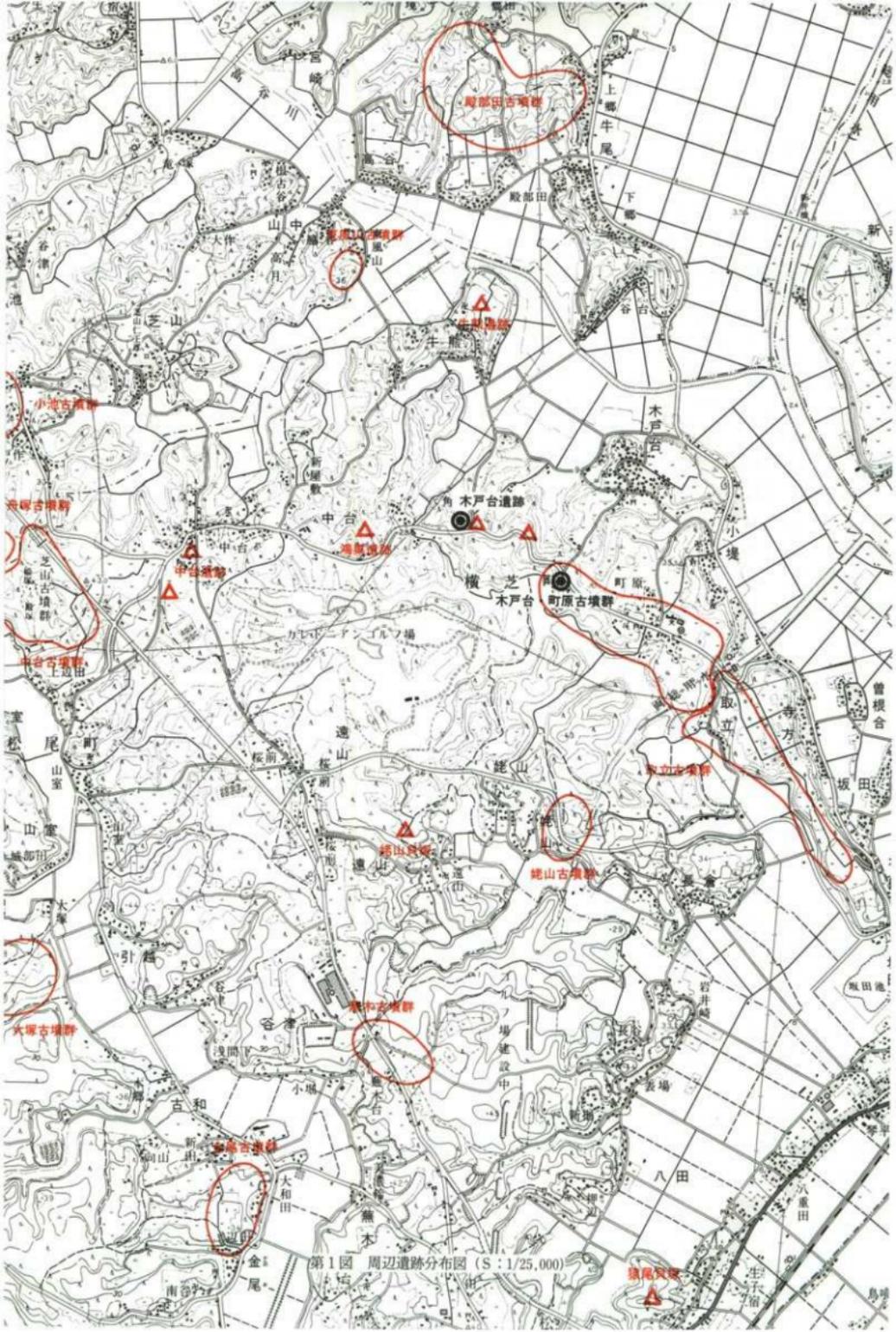
整理担当者：主任技師 萩原恭一（6月31日まで）、主任技師 高柳圭一（7月）

2 遺跡の位置と歴史的環境

木戸台・町原古墳群と木戸台遺跡は、北総台地を開析して九十九里平野から太平洋へと注ぎ込む栗山川の支流高谷川から南西側にのびる小支谷に面する台地上に位置する遺跡である。両遺跡は直線距離にして700mほど離れており、遺跡の面する小支谷は異なる。

木戸台・町原古墳群は、今回調査対象となった方墳の4号墳と円墳の5号墳が現状で残っているだけであるが、本来は前方後円墳1基、円墳4基、方墳1基の合計6基で構成されていた古墳群である。このほかに、東に数百m離れた地点にある3基の円墳と4基の方墳をも現在木戸台・町原古墳群として含めているが、立地から見て本来は同一古墳群に含めて考える必要はないであろう。今回の調査で方墳の築造時期は7世紀前葉と想定できるが、円墳については時期を特定することはできなかった。出土遺物の中に埴輪片が2片のみであるが検出されており、周辺の削平された古墳の中に埴輪を持つものがあった可能性が考えられる。そのほかの周辺の古墳群としては、同じ台地上の南東方向に取立古墳群があるが、それほど大きな古墳群ではない。大規模古墳群としては、栗山川と高谷川との合流地点に突き出した台地上に芝山町殿部田古墳群があるが、河川の対岸である上に、直線距離にして3kmほども離れている。西に3kmほど行くと殿塚・姫塚古墳を擁する中台古墳群（通称芝山古墳群）があるが、これは木戸川流域となり水系が異なる。また、そのすぐ北には小池大塚古墳を含む舟塚古墳群がある。そのほかに図示した古墳群の中には大塚姫塚古墳を含む松尾町大塚古墳群、朝日ノ岡古墳を含む松尾町蕪木古墳群等がある。また、木戸台遺跡から北北西へ1.5kmほど離れたところには東風山横穴群がある。

木戸台遺跡は縄文時代早・前期を中心とする遺跡である。その立地する高谷川流域には、縄文時代の遺跡が多く点在しており、この近辺は栗山川流域の調査の一環として、昭和27年以降慶應義塾大学等による発掘調査が実施されてきた。木戸台遺跡の東側の小支谷の斜面には、中期の木戸台貝塚、同一支谷の西側対岸には後期前半の鴻ノ巣貝塚が立地し、高谷川を見おろす舌状台地の先端部には後期後半の牛熊貝塚、西側支谷の谷奥には中期から晩期の地点貝塚である中台貝塚が立地している。また、高谷川の低地部にも遺跡の存在が認められており、古くから丸木舟や櫓が出土し、水上交通をうかがい知る上で貴重な資料として注目されてきた。中でも高谷川左岸の高谷川遺跡からは、後期の丸木舟のほかに漆塗りの櫓が出土し、縄文時代の工芸技術の高さを示す資料として、多くの文献で紹介されている。なお、支谷は異なるが、後・晩期の著名な遺跡である山武姥山貝塚は、木戸台遺跡より南へ直線で1.7kmの距離にある。

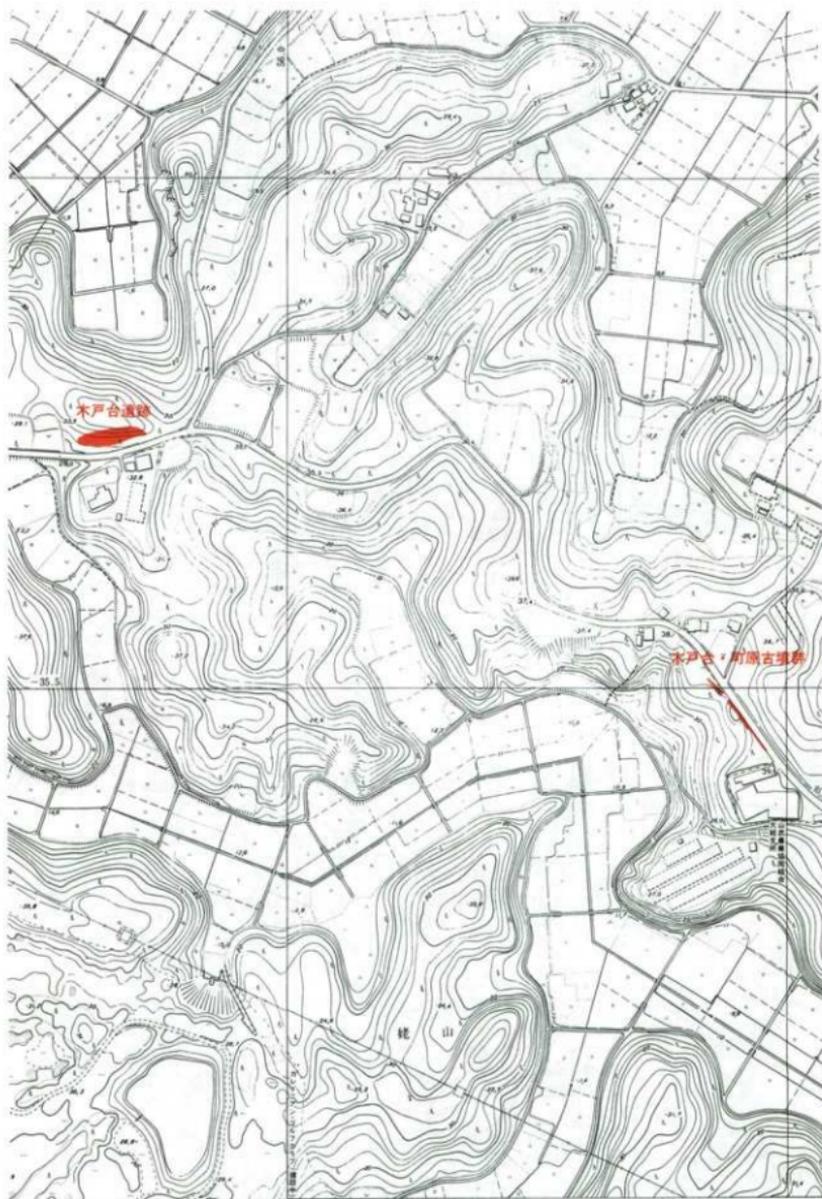


第1図 周辺遺跡分布図 (S:1/25,000)

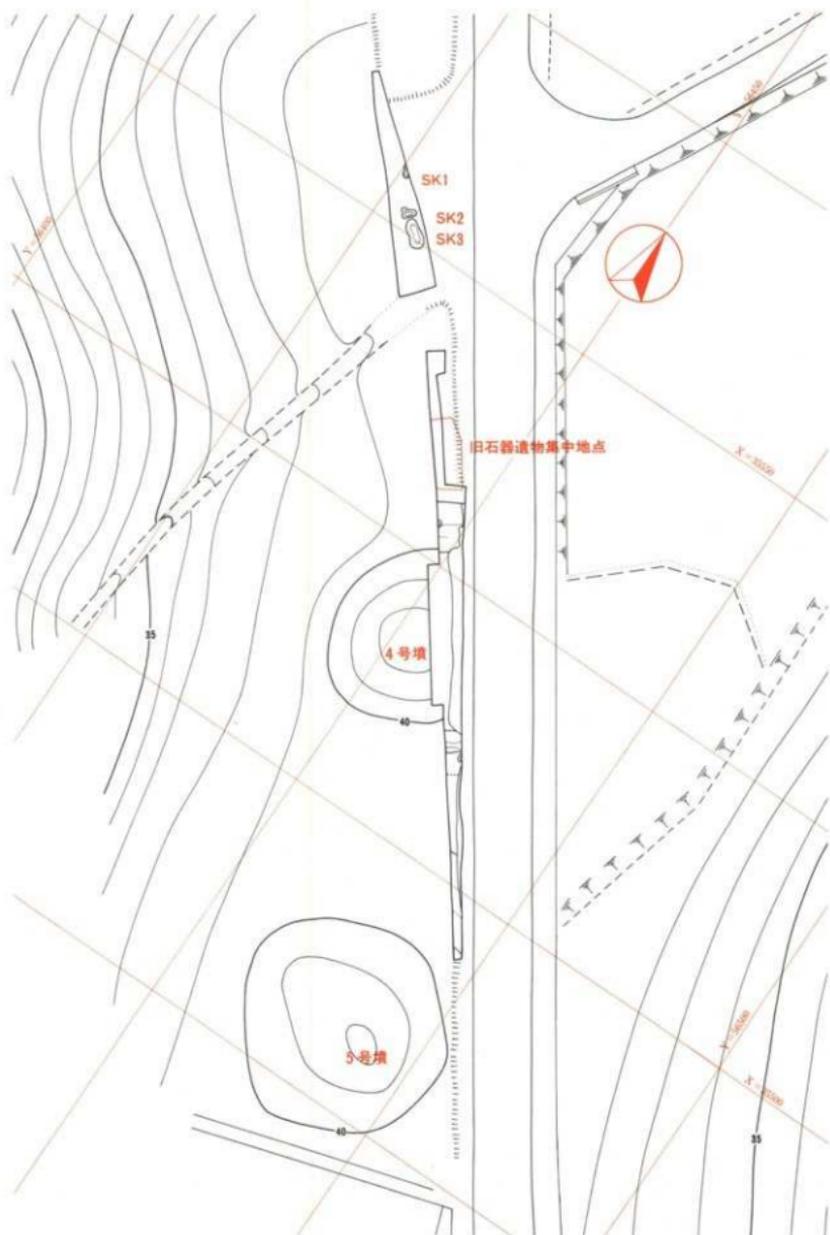
遺跡名



生木宿
八田
重田
坂田
曾根合



第2図 木戸台・町原古墳群、木戸台遺跡周辺地形図 (S:1/5,000 第IX座標系)



第3図 木戸台・町原古墳群遺構配置図

II 木戸台・町原古墳群

1 遺跡の概要

現県道建設の際に部分的に削平された2基の古墳の一部と、その北西に続く部分の細長い調査区において発掘調査を行った。調査は平成5年度と平成7年度の2度にわたっている。2基の古墳は木戸台・町原古墳群4号墳（方墳）と5号墳（円墳）である。4号墳は残存墳丘が幅5mほど調査区にかかっており、周溝のほかには墳丘断面を観察することができた。5号墳については、残存墳丘はほとんど調査区から外れており、周溝の一部を調査することができたのみである。4号墳部分の調査段階において旧石器の遺物集中地点1か所が検出されている。4号墳の北西に隣接する部分では3基の炉穴が検出された。炉穴からは遺物は検出されなかったが、道路を挟んだ東側の現造成地を働山武都市文化財センターが発掘調査した際に、縄文時代早期の遺物を伴う炉穴群が検出されており、同時期のものと考えられる。

2 旧石器時代

(1) 概要

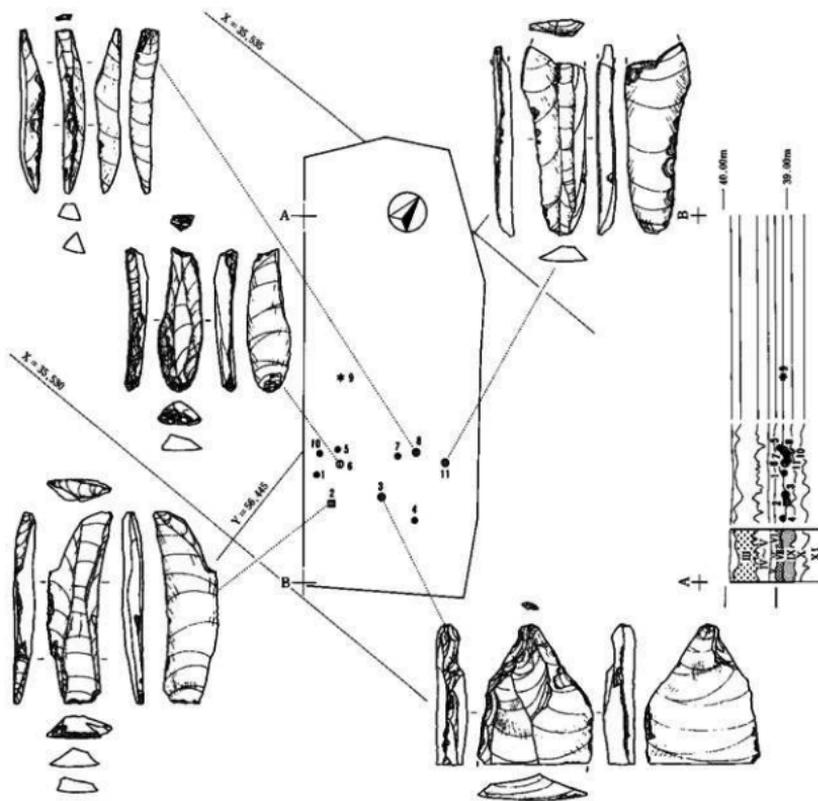
旧石器時代の遺物は4号墳北西側の下層確認で検出された。拡張し本調査を行った結果、11点が出土し、小規模ながらもまとまった遺物集中分布となった。ブロックの範囲は調査範囲外の南西寄りの谷方向に広がる可能性があるが、ほぼ、ブロックの中心部の概要は捉えられたと考えられる。このブロックは馬の背状の台地に東西方向から入り込む小支谷のくびれ部分に位置し、台地西隅縁部に分布している。調査の結果、第2黒色帯中部（IX層上部～VII層下部）に産出層準のある1か所のブロックと把握される。本遺跡では単独ブロックのみの検出であるが、便宜上、第1ブロックと呼称し、1文化層を設定して報告する。

(2) 第1ブロック（第4・5図、第2表、図版6・7）

分布状況 調査区の南西側に位置している。地形では西側の小支谷に面した端部に当たり、現況では4号墳のマウンド方向から北西方向に傾斜した面に位置している。公共座標 $x = 35,532$ 、 $y = 56,444$ を中心として分布しており、分布範囲は南北1.8m、東西2.3mを測る。遺物総数は11点のみの出土であり、やや東西方向に長い不整形形状に狭い範囲に分布する。垂直分布では約0.2mの高低差があり、土層断面の投影ではIX層上部からVII層下部にかけて分布し、ほぼIX層上部に垂直分布の集中が認められる。立川ローム層の堆積状況はやや南西方向に傾斜していると考えられるが、土層断面部分では比較的安定しており、遺物の産出層準はIX層上部に帰属すると考えられる。

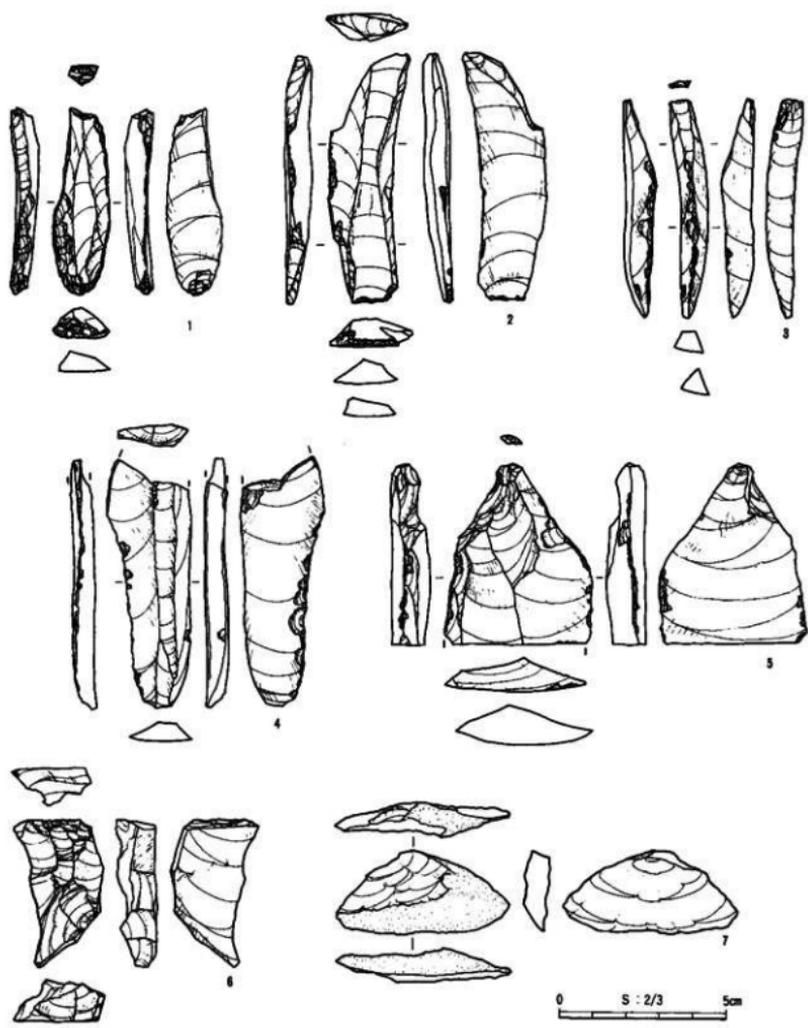
母岩分布 珪質頁岩6母岩6点、凝灰岩2母岩2点、砂岩2母岩3点の10母岩が認められる。砂岩1が2点存在するのみで、ほかの母岩はすべて単独母岩である。珪質頁岩が6母岩と主体を占める。砂岩1は南西隅のやや分布密度が高い部分に近接して分布する。

出土遺物 遺物総数は11点と少ないが、主要な器種はナイフ形石器、彫刻刀形石器、石刃が出土し特異な器種構成となっている。1はナイフ形石器である。石刃を素材として、素材の打面を基部に設定し基部側の両側縁と背面右側縁上部から先端部にかけて精緻なブランディング加工が施される。この上端の調整加工は素材を切断するように調整され、この調整面を打面として左側縁を切るように穂状の剝離が行わ



第4図 旧石器時代遺物出土状況図

れる。2は彫刻刀形石器である。石刃を素材として、素材の打面部を細部加工して切し基部を設定している。器体の背面右側縁先端部から左側縁に器体を斜めに切るように楕円状剥離が施されて彫刀面を作り出している。両側縁には疎らな細部加工が見られる。3はいわゆる小石刃である。右面に素材の主要剥離面のポジティブ面が観察される。中央の稜には刃こぼれ状の細部剥離痕が顕著である。腹面左側縁打面近くとポジ面下部には2次調整の細部加工が認められる。4・5は石刃である。4は打面部を切し状に欠損するが、中形石刃の範疇に入るものである。やや先端が細くなる器体形状を呈し、腹面右側縁の細部加工が顕著である。5は下半部を切断するが、復元されれば大型石刃の器体長をなすものと推定される。頭部調整が顕著な調整打面から剥離されたもので、背腹面の両側縁には微細剥離痕が顕著で、切断面右側にも微細剥離痕が認められる。6・7は剥片である。6は縦長剥片で平坦打面からの頭部調整が顕著で、底面には器体背面方向からの剥離痕が観察される。7は砂岩1を母岩とする横長剥片で、礫素材の石弁から剥がされた調整剥片状を呈する。図示しなかったが、同一母岩のもう1点は同種の剥片である。



第5圖 旧石器時代遺物実測図

No	遺物番号	器 種	最大長×最大幅×最大厚 (mm)	重量 (g)	標圖 番号	打面 形状	打面 調整	打角 (°)	背 面 調 整				調整 部位	折面 部位	母岩番号	
									C	I	II	III				
1	4号墳66	割 片	25.0×52.9×10.2	10.4	7	自然	—	100	○	1						砂 岩 1
2	4号墳67	彫刻刀形石器	73.7×25.2× 8.5	11.4	2								B.L			珉質頁岩 1
3	4号墳68	石 刃	53.7×45.1×11.9	23.9	5	平組	○	91		5				M		珉質頁岩 2
4	4号墳69	割 片	19.7×22.4× 4.0	1.3		平組	—		○	4						珉質頁岩 3
5	4号墳70	割 片	24.4×39.1× 8.3	7.6												砂 岩 1
6	4号墳71	ナイフ形石器	55.3×17.0× 8.8	6.8	1								B.R			珉質頁岩 4
7	4号墳72	割 片	34.7×26.3×23.3	13.0		自然	—		○	1	2					凝 灰 岩 1
8	4号墳73	石 刃	64.8×11.5×10.0	3.7	3	平組	○	105		3						凝 灰 岩 2
9	4号墳74	鏃	17.1×14.4×13.2	3.7												砂 岩 2
10	4号墳75	割 片	43.9×27.3×11.8	11.4	6	平組		96		5	2					珉質頁岩 5
11	4号墳76	石 刃	74.4×25.2× 6.9	11.7	4	—	—	—		4			L	H		珉質頁岩 6

第 1 表 旧石器時代遺物属性表

3 縄文時代

(1) 炉穴

SK 1 (第 6 図、図版 6)

遺構の北側の部分は樹根と旧道の法切りによってわずかに削平されている。長軸は1.62mで、短軸は炉床側で0.62m(最大遺存部分)である。深さは10cm程度の浅い掘込みで、遺構の南西部に炉床を持つ。遺物は検出されなかった。

SK 2 (第 6 図、図版 6)

SK 3 の北西に隣接する。西側部分に炉床を 2 か所持ち、平面形は楕円にもう一つの円が付いたように見える。規模は南西から北東方向の長軸が1.37m、西側に隣接する掘込みが径0.65mである。深さは10cm程度で浅い。遺物は検出されなかった。

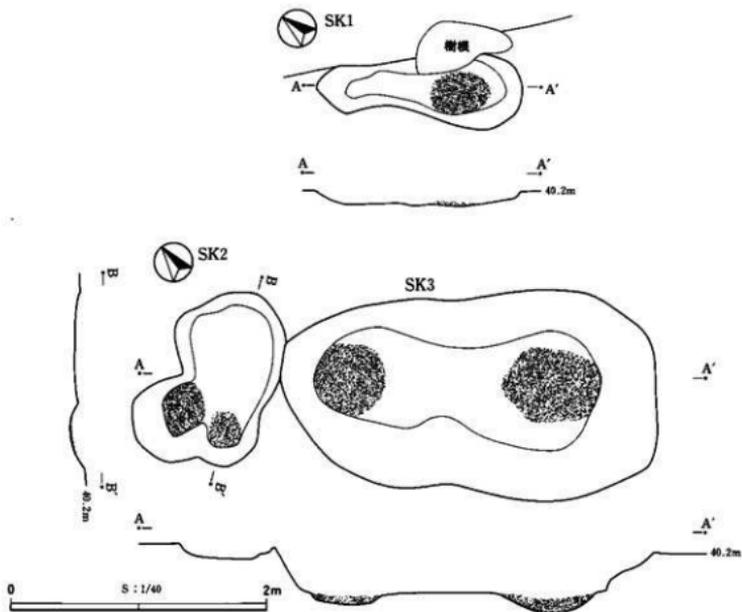
SK 3 (第 6 図、図版 6)

SK 2 の南東に隣接する。ほかの 2 つの炉穴に比べると、大型で掘込みもしっかりしている。長軸は3.0mで短軸は北西側で1.47m、南東側で1.65mである。深さは0.45mから0.55mである。北西部と南東部に 1 か所ずつ炉床を持つ。焼土の堆積は北西部のものが0.06m、南東部のものが0.12mで、比較的厚い堆積を見せている。遺物は検出されなかった。

(2) 4号墳出土の縄文時代の遺物(第7図、図版8)

出土した縄文土器は後・晩期に限られ、いずれも古墳縁辺部から出土している。1・2は後期の粗製土器である。1は加曾利B1式に相当し、LR縄文施文後、6mm幅の半截状工具で、格子目状に沈線が加えられる。2は加曾利B3式に相当し、口縁が外半し、指頭痕を有する紐帯が巡らされる。体部はLR縄文の縦位方向回転施文後、横位の沈線が施される。3～6は晩期末葉の土器である。3は晩期終末の沈線施文の土器で、口縁直下に多条の平行沈線が施される。口縁部は無文で、口端は外側に削がれている。4・5は体部に屈曲を有す深鉢(甕)で、口頸部が無文となる。体部には条痕が施されるが、4は部分的に節が認められ、絡条条痕の可能性はある。6は精製の浅鉢と思われる。口縁から弧状に浮線が施される。表面の磨耗が著しく、文様の詳細は分からない。

7は石英斑岩製の磨石で、半分が欠損している。表裏面・側面が研磨され、下端部及び表面に叩き痕が認められる。8は楔形石器で、両端から調整が加えられる。9は不定形の割片であるが、先端に調整が加えられる。



第6図 炉穴実測図



第7図 縄文時代遺物実測図

4 古墳時代

(1) 4号墳 (第8・9図、図版2・3・4・5)

現状の道路によって、既に北東側の1/3が削平されていた。調査前の立木等を除去した時点での見かけ上の規模は、墳丘の高さが3.5m、一辺22m前後で、方墳であると考えられた。現状では段築の形跡は見当たらなかった。今回の発掘調査は道路の拡幅工事の事前調査であり、墳丘部分について行う土木工事は斜面の法切り工事である。高さに対して調査区の幅が狭いため墳丘部分についての調査は変則的とならざるを得ず、上下2段に分けての階段掘りを行った。

4号墳に伴うものとしては周溝を検出したのみである。南東側の周溝は外側立上がり上端部分を明瞭に出すことができなかったが、上端幅(周溝内側上端は旧表土部分を目安とした)で約3.4m、下端幅0.5mから0.7m、旧表土層上端面から見た掘込みの深さは1.5mである。北西側で検出した周溝は上端幅で(前述と同様の計測方法)4.8m、下端幅1.2m、旧表土上端面から見た掘込みの深さは1.2mである。

上下2段に分けて実測した墳丘土層断面図を合成したものが第9図である。中間に見える横方向の空白帯が上下の境の部分である。封土は暗褐色土とロームを主体としており、ロームの含有量の多寡で大きく二分類できる。封土上半にはロームを多く含む層は少なく、下半にロームを多く含む層が集中する。もう少し詳細に説明すると、旧表土上面にロームを多く含む層が一度集中し、その上に暗褐色土を主体とする層が何層も続き、さらにその上にもう一度ロームを多く含む層が続き、その上は墳丘上端までほとんど暗褐色土主体である。旧表土上端面から現墳丘上端面までの高さは3.1mである。

調査対象区内では主体部を検出することはできなかった。

今回の調査面積はこの古墳にとってごくわずかな部分でしかないが、その調査成果から本古墳の本来の規模を復原すると以下ようになる。

墳丘比高(旧表土上端面から) : 3.1m 墳丘規模(旧表土上端面で一辺) : 17.5m

周溝上端幅 : 4.5m 周溝深さ(旧表土上端面から) : 1.2m~1.5m

周溝外郭規模(一辺) : 26.5m

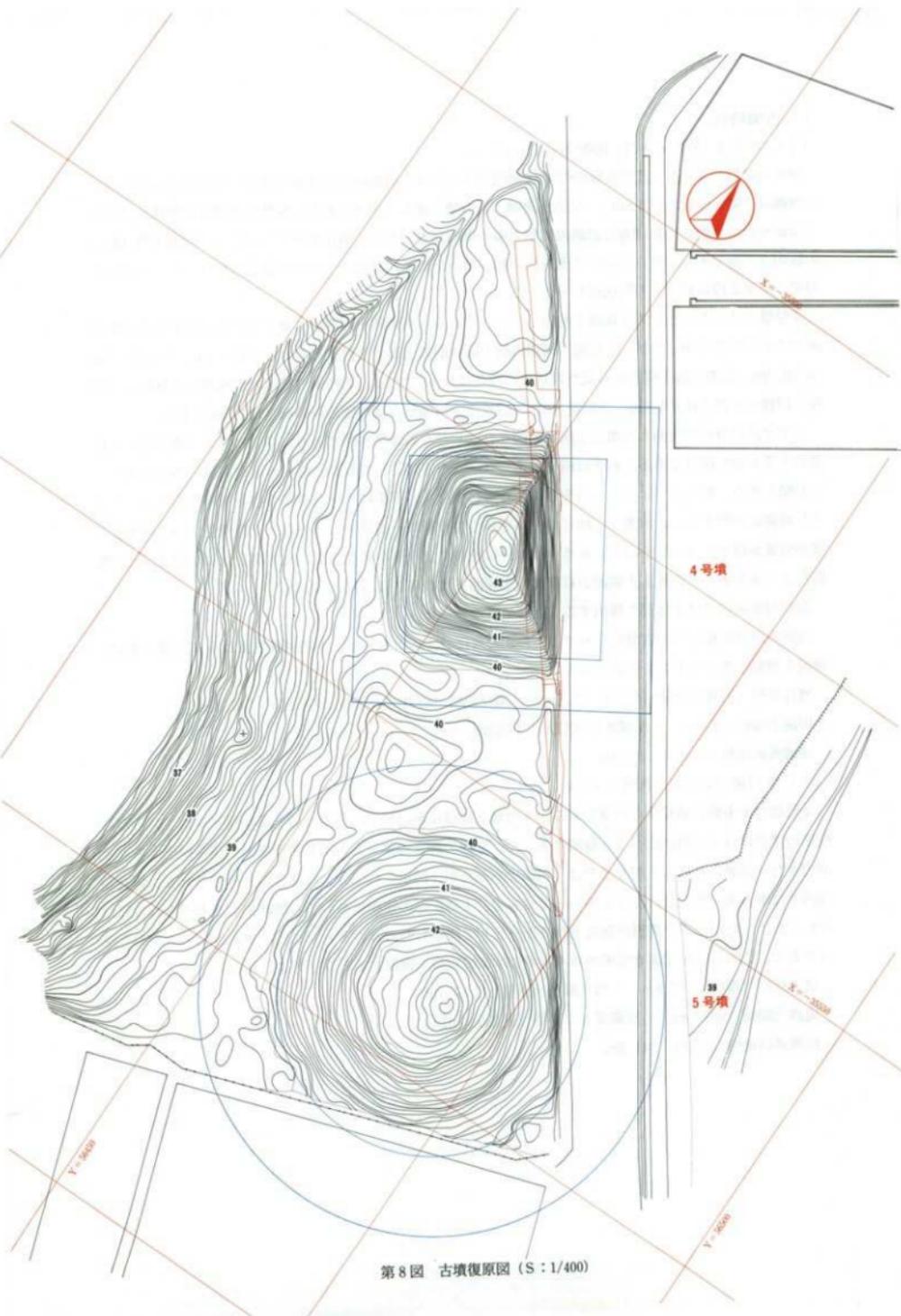
(2) 5号墳 (第8図、図版2・5)

4号墳の南東側に隣接する円墳である。4号墳と同様に現道によって墳丘の一部が削平されているが、削平の度合いは4号墳に比べると軽微であった。今回の調査によって古墳北側周溝の一部を検出することができた。周溝の外側立上がり部分は不明瞭であったが、図示した部分でほぼ良いと考えられる。調査範囲内では本古墳の墳丘はほとんど掛かっておらず、土層断面の観察においても墳丘封土と考えられる層はなかった。したがって、周溝内側立上がり部分として図示したのは、トレンチ内の見かけ上の立上がり部分である。このわずかな調査成果から本古墳の本来の規模を復原すると以下ようになる。

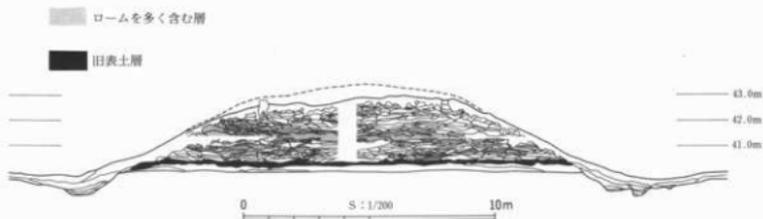
墳丘比高(現状) : 2.8m 墳丘規模(直径) : 27.5m

周溝上端幅 : 約7.0m 周溝深さ : 不明(最低0.4m以上)

周溝外郭規模(直径) : 41.5m



第8圖 古墳復原圖 (S : 1/400)



第9図 4号墳墳丘断面図

(3) 4号墳出土遺物 (第10図、図版8)

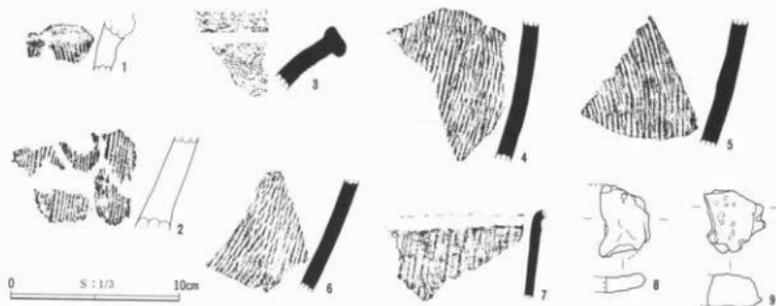
1・2は埴輪片である。小片であり、時期を決定できる遺物ではないが、外面には共に一時調整の縦ハケが施されている。内面は共に縦方向の指ナデ調整が見える。破片量が少ないことと、本古墳が方墳であることを考え合わせれば、木戸台・町原古墳群を形成する周辺の古墳に樹立されていたものの混入である可能性が高い。

3～6は須恵器大甕の破片資料である。3が口縁部付近の破片で、頸部外面に波状文が施されている。

4～6の破片は色調等から考えて3の同一個体の胴部片であろうと考えられる。

7は須恵器甕又は甎の破片資料である。

8・9は製鉄遺物で、共に碗形滓である。



第10図 古墳時代遺物実測図



第11図 木戸台遺跡遺構配置図 (S : 1/500)

III 木戸台遺跡

1 遺跡の概要

馬の背状の台地の南西斜面部分の調査である。縄文時代早期又は前期の竪穴住居跡1軒、土坑33基という遺構群を主体とする遺跡である。古墳時代後期の遺構として、1基の土坑と1基の性格不明遺構を検出している。道路遺構が4条検出されているが、現県道以前の道路の痕跡と考えられる。

遺跡西側のかなり低くなった所には畑があり、小支谷が埋没した後にさらに整地して耕作をしている。この畑において、当遺跡で検出されたのとはほぼ同時期の縄文土器小片を採集することができた。また、狭い面積ではあるが遺跡北側には台地上端の平坦面が隣接しており、さらに遺構が続いている可能性が高い。

縄文時代の遺構の多くから遺物が検出されているが、そのほとんどは覆土中からの出土であり、床面直上の良好な出土状態のものは皆無であった。

2 縄文時代

(1) 遺構

縄文時代の遺構と考えられるものとしては、竪穴住居跡、小竪穴と考えられる遺構及び性格不明の土坑が検出されている。

SK 2 (第12図、図版10)

平面形は細長い不整形円形である。底面は平坦ではなく、柱穴様の掘込み等が絡み合った形態となっている。長軸3.44m、短軸1.32mで、平均的な深さは0.2m～0.25mである。極端に深い柱穴様の掘込みは0.3m～0.35mである。

SK 3 (第12図、図版12)

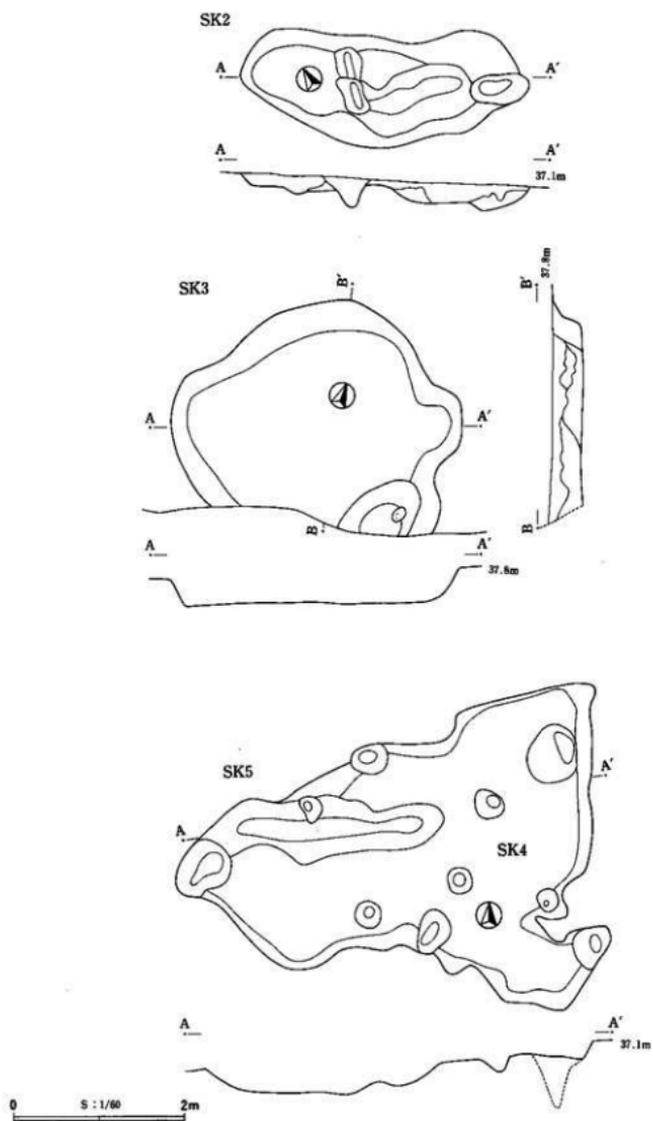
平面形は不整形である可能性が高いが、円形の掘込みが複合しており、一見不整形円形のようにも見える。南東側1/4ほどは現状の道路切通しの崖線に掛かっており削平されていた。北東側の張り出し様の部分はカマド痕跡のように見えるが、焼土等の痕跡は一切なかった。規模は北東-南西軸で3.1m、深さは平均0.35mである。床面はほぼ平坦で、東隅に楕円形の掘込みが複合しており、深さは0.1mである。

SK 4・SK 5 (第12図、図版10)

当初2基の土坑と捉えて、東側をSK 4、西側をSK 5と遺構番号を付して調査を始めたが、最終的に一つの土坑となった遺構である。SK 5として捉えていた部分は西側の東西にのびる細長い土坑で、長軸2.7m、短軸0.7m、確認面からの掘込みの深さは0.3mである。東側のSK 4として捉えていた部分は平均の深さ0.15mで、そのほかに幾つかの柱穴様の掘込みが絡み合っている。柱穴様の掘込みの深さは最も深いもので0.65m、浅いもので0.15mである。覆土は黒褐色土、暗褐色土、褐色土にそれぞれローム粒・ローム塊が混入している。

SK 7 (第13・14図、図版10)

南側に向かって谷地形となっている斜面部に検出された遺構で、SK 9と複合しているが前後関係を明確にすることはできなかった。南半分が段差を持つ掘込みによって破壊されているが、SK 9から東にのびSK



第12図 SK 2・3・4・5実測図

8をも同様に破壊しているこの掘込みが、一体何であるのか性格を特定することはできなかった。SK7の遺存部分は径2.4mで、深さは0.3m～0.35mである。底面は地形の傾斜方向に向かってそれよりもやや度合いの弱い傾斜を見せている。南側段差直下に径0.3m、深さ0.4mの柱穴様の掘込みがある。本遺構に伴うものである可能性は高いが、断定はできなかった。

SK8 (第13・14図、図版10)

状況はSK7と同様であり、南側半分は破壊を受けている。平面形はやや角張った部分を持つ不整形である。規模は確認されている最大部分で2.4m、深さは0.2m～0.3mである。SK7同様に遺構中央部分に径0.4m、深さ0.2mの柱穴様の掘込みを持つ。底面は地形の傾斜よりもやや弱い度合いで傾斜している。

SK9 (第13・14図、図版10)

本遺跡で検出された遺構のうち唯一一室穴住居跡である。SK7の西側に隣接し、SK7を破壊していると考えられる。図中破線で示した部分は床面と考えられ、ほぼ平坦で硬化している。遺存部分での最大規模は4.5mであり、本来はこれよりも大きな掘込みであることは確実であるから、かなり大型の住居であったと考えられる。深さは0.5m～0.55mである。壁面は直立ではなく、やや斜めの立上がりを見せる。床面には柱穴様の掘込みが3か所ある。深さは0.25m～0.3mである。確認できた範囲内では炉は検出できなかった。

SK10 (第13・14図、図版10)

傾斜地形に位置している。南西側の斜面下方はSK11とした土坑によって破壊されており、北東側半分程度が確認できたのみである。平面形は方形と考えられる。東西方向で2.6mの規模が確認できた。深さは0.1mである。遺構内には柱穴様の掘込みが6か所ある。そのうち最も掘り込みのしっかりしているものの深さは0.4mである。底面は形全体の傾斜方向に若干傾斜しているが、総体としてはほぼ平坦である。

SK11 (第13・14図、図版10)

SK10・17の南側に位置する。SK7～SK9の南側に広がる段差に近い形態のものであるが、底面がほぼ平坦であることから、遺構と考えた。平面形態は不整形方形又は不整形円形と考えられるが、北側中央のSK17とSK10の間の所に張り出し部分を持つ。確認部分での東西幅は5.2mである。底面と考えられる部分には4個の柱穴様掘込みがあり、深さは0.3m平均である。

SK37 (第13・14図、図版10)

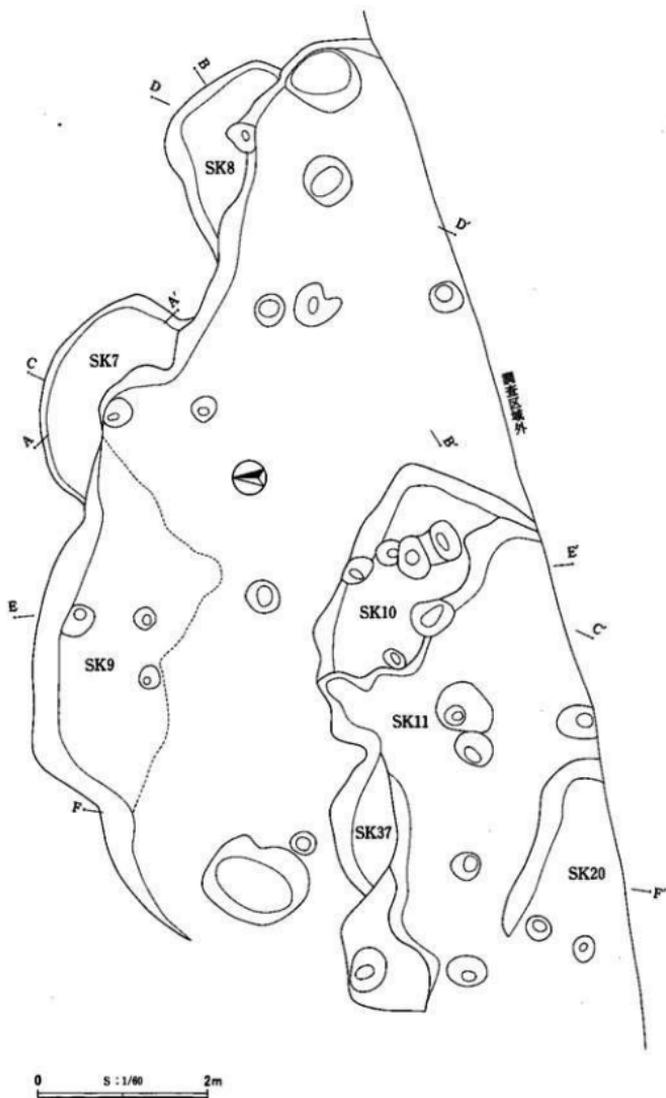
SK11の北側に位置し、南側部分は検出できなかった。確認部分の最大遺存規模は東西方向の1.7mで、深さは0.2mである。底面はほぼ平坦であるが、柱穴等の掘込みは一切確認できなかった。

SK20 (第13・14図、図版10)

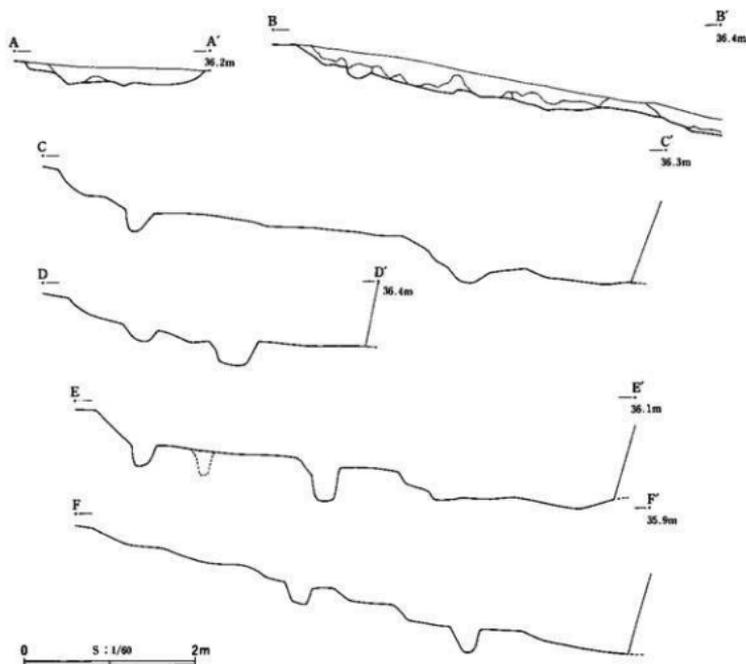
SK11の南側に位置し、遺構の大半は現状の道路の切り直しによって破壊されている。確認できた部分から考えて平面形は方形であったと思われる。遺存部分の規模は東西方向の最大部分で2.3m、深さは0.15m～0.2mである。底面は地形の傾斜方向にわずかに傾斜している。平面図中の一見柱穴のように見える掘込みは浅く、遺構に伴う柱穴として解釈することはできない。

SK12 (第15図)

平面形は楕円形で、西側に小さな円形の掘込みが複合している。規模は長軸3.0m、短軸2.5mで、深さは平均0.25mである。底面は自然地形の傾斜とほぼ同様の傾斜を見せる。西端に見える複合している掘込みの深さは0.3mである。



第13圖 SK7・8・9・10・11・20・37実測図



第14図 SK 7・8・9・10・11・20・37断面図

SK13 (第15図、図版11)

平面形は崩れた長方形で、長軸1.95m、短軸1.2m、深さは0.1mである。

SK14 (第15図、図版11)

平面形は長方形で、長軸1.95m、短軸1.15m、深さは0.1m～0.15mである。底面はほぼ自然地形と同様の傾斜を見せている。

SK15 (第15図)

不整形の浅い掘込みと柱穴様の掘込みとが複合している。浅い掘込みの部分は径1.45m前後、深さ0.1m、柱穴様の掘込みは径約0.5m、深さ約0.25mである。

SK16 (第15図)

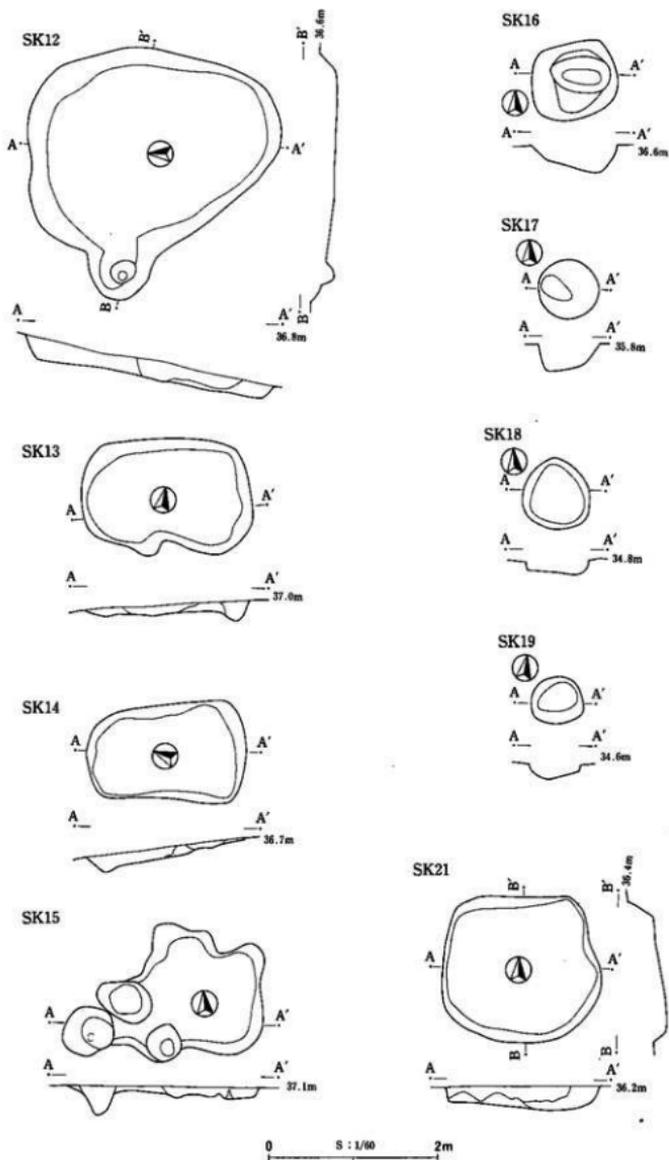
平面形はやや角張った円形で、規模は径1.0m、深さ0.35mである。覆土はローム粒をやや多く含む暗褐色土である。

SK17 (第15図)

平面形はほぼ正円形で、径0.7m、深さは0.3mである。

SK18 (第15図)

平面形はややいびつな円形で、径0.9m前後、深さは0.15mである。



第15図 SK12・13・14・15・16・17・18・19・21実測図

SK19 (第15図)

平面形はややいびつな円形で、径0.55m～0.6m、深さは0.2mである。

SK21 (第15図)

SK12の南西に隣接している。平面形は隅丸の方形である。規模は1.7m×1.9m、深さは平均0.25mである。底面はほぼ自然地形同様の傾斜を見せる。

SK23 (第16図、図版11)

不整形の土坑が2基結合している可能性が高いが、土層断面の観察では切合いの様子は見られなかった。規模は東西方向で2.95m、南北方向で2.1m、深さは0.2m～0.3mである。底面はほぼ自然地形同様の傾斜を見せる。

SK24 (第16図)

SK23の西側に隣接する土坑である。平面形は楕円形で、規模は長軸1.6m、短軸1.15mである。底面は二段になっており、南西側が柱穴様の掘込みになっている。深さは北東側で0.25m、南西側で0.35mである。

SK26 (第16図、図版11)

平面形は円形で、径1.1m～1.2m、深さは0.4mである。覆土はローム粒を含む暗褐色土である。

SK27 (第16図、図版11)

平面形はやや楕円形で、長軸1.2m、短軸1.0m、深さは0.8mである。斜面に掘り込まれており、地山は黄褐色砂質土層で、覆土は暗褐色砂質土である。

SK28 (第16図、図版12)

SK28～SK31は並んで検出されており、平面図においても検出時のとおり並べた。平面形は楕円形で、長軸0.7m、短軸0.55m、深さは0.3mである。ただし、SK31については浅い掘込みであるので図の提示のみにとどめ、説明は省略する。

SK29 (第16図、図版12)

平面形は楕円形で、長軸0.6m、短軸0.45m、深さはわずかに0.1mである。底面付近の覆土中に焼土が広がっていたが、炉穴のような性格であるのかどうかは疑問である。

SK30 (第16図、図版12)

平面形は長楕円形で、長軸1.15m、短軸0.45mである。底面は二段になっており、深さは北西側が0.2m、南東側が0.5mである。

SK32 (第16図、図版12)

平面形は楕円形で、長軸1.2m、短軸0.9m、深さは0.1mである。

SK33 (第16図、図版11)

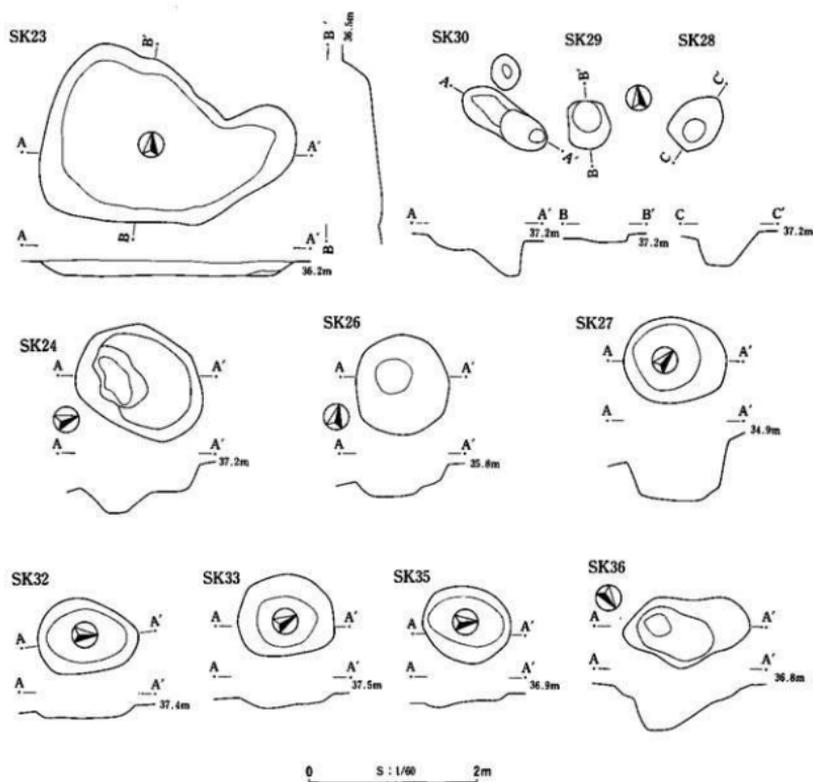
平面形はわずかに楕円形を示し、長軸1.15m、短軸0.95m、深さは0.15mである。

SK35 (第16図)

平面形は楕円形で、長軸1.05m、短軸0.9m、深さは0.1mである。

SK36 (第16図)

平面形は楕円形で、長軸1.5m、短軸0.8m、深さは0.5mである。



第16図 SK23・24・26・27・28・29・30・32・33・35・36実測図

(2) 遺物

(ア) 縄文土器 (第17・18図、図版13・14・15・16)

図示した資料のほとんどが遺構内出土のもので、遺構外からの出土は少なかった。ここでは遺構ごとに説明を加えることにする。

SK1 (1~3)

1は興津Ⅱ式の口縁部で、口端に半截竹管による条線帯が巡らされる。2は半截竹管により曲線文様が施され、前期後半の土器と思われる。3はSK24出土の土器と接合する。少量の繊維を包含し、波状の条線文が斜位に施され、内面が研磨される。条線文は絡条体の可能性を有し、子母口式と思われる。

SK2 (4)

4は繊維を包含し、折り返しによる帯状の口縁を呈し、内外に1条の沈線が巡らされる。体部には貝殻条痕文が施され、内面は凹凸に富む。野島式と思われる。



第17圖 縄文土器拓影圖(1)

SK 3 (5)

5は底部付近で、LRが横位・縦位両方向に施文され、羽状を呈する。前期ころに相当すると思われる。

SK 5 (6~15)

6は繊維を少々包含し、竹管状工具による刺突文を有し、胎土には砂粒が多く含まれる。子母口式と思われる。7は繊維を包含し、表裏面共に貝殻条痕文が施され、表面には刺突が加えられる。野島式と思われる。8は小礫を少々含み、橙色を呈し、4本一組の沈線で文様が構成される。9は内面が研磨され、太沈線による区画内に刺突が加えられる。いずれも田戸下層式である。10は繊維を包含し、区画内を短沈線で充填され、裏面に貝殻条痕文が施される。野島式と思われる。11は口縁が多少外反し、2条の沈線が巡らされ、2段の刺突帯を有する。体部にはアナグラ属貝殻の腹縁圧痕文が施される。野島式と思われる。12~14は繊維包含の表裏条痕文の土器で、早期後葉の所産であろう。15は半截竹管による区画内に貝殻連続文を有し、内面が良く研磨される。興津II式である。

SK 7 (16~24)

16は口縁が肥厚し、口端が外側に削がれ、沈線による刻みが加えられる。横位沈線下に粘土を盛り上げた刺突が施され、内面は良く研磨される。田戸上層式と思われる。17は縦位・斜位沈線文の土器で、田戸下層式である。18は口縁に瘤状突起を有し、口端内側と口縁直下に刻みを有する。突起頂部には貝殻による疝痕が加えられ、内面は良く研磨される。田戸上層式である。19は表裏に条痕文が施される。20は口縁がやや角頭状を呈し、口縁直下に凹線が施される。口端・内面は良く研磨され、外面のミガキはやや粗い。田戸上層式と思われる。21は器壁が薄く、貝殻の疝痕文が段をもって構成される。常世式との関連が想定され、田戸上層式と思われる。22は繊維を包含し、RLが浅く施される。早期後葉から前期前葉の所産である。23は末端が閉じたLRが施される。前期末葉と思われる。24は波状口縁を呈し、波頂部から垂下する隆帯と斜位の隆帯で、三角形の文様が構成される。中期前半と思われる。

SK 8 (25~40)

25~27は同一個体で、縦位・横位・斜位の太沈線で構成される。内面は縦位に良く研磨されている。28・29は同一個体で、斜位の沈線間を刺突で充填する。30は斜・縦位の太沈線と横位の細沈線、31・32は横位の細沈線、33は区画内を斜位の沈線で構成される。いずれも田戸下層式に比定される。34は口縁が外反し、口端が角頭状を呈し、矢羽状の短沈線が加えられる。体部には区画沈線内に刺突列が巡らされる。35は区画沈線内に粘土を盛り上げた刺突が加えられる。いずれも田戸上層式と思われる。36は薄手で、山形突起を有し、斜位の集合沈線が、交互に施される。内面には横位の貝殻条痕文が加えられる。野島式に比定される。37は口縁が尖鋭となっており、表裏に貝殻条痕文が施される。野島式相当と思われる。39は半截竹管による爪形文を有し、内面は横位に良く研磨される。前期後半に位置づけられよう。40は口縁が外反し、口縁に沿って沈線が巡らされ、櫛歯状工具による連続刺突が加えられる。胎土には小砂粒を多く含み、内面が良く研磨され、興津II式相当と思われる。

SK 9 (41~57)

41は斜・横位の太沈線と刺突で構成される。内面は縦位に良く研磨される。42は薄手で、横位と斜位の沈線で構成される。43と44は同一個体で、口端が内側に削がれ、横位の太沈線が幾重にも施される。内面は横位に良く研磨され、胎土に小砂粒を多く含む。45は底部に近い部位で、斜位の沈線で構成されるが、沈線は明瞭ではなく、研磨が良好である。46は横位の平行沈線が巡らされ、その深さは浅・深交互である。



第18圖 縄文土器拓影圖(2)

いずれも田戸下層式に比定される。47は縦横位の沈線による区画内を斜位の沈線で充填され、内面には弱い条痕文を有する。48は斜位の隆起線から矢羽状に沈線が加えられる。49は曲線的区画内に横位の沈線が充填される。50は微隆起線で文様が構成され、口唇にへら状工具による刻みを有する。51は横位と斜位の沈線が施され、内面に斜位の貝殻条痕文を有する。いずれも野島式に比定される。52・53は表裏に条痕文を有する口縁資料で、53は面取りがなされ平坦である。薄手で胎土が緻密であることから野島式に相当すると思われる。54～57は前期後半の土器で、54は燃糸文Lを地文とし、隆帯を巡らし、半載竹管で「木の葉文」が施され、浮島Ⅰ式である。55は波状貝殻文が施される。56・57はアナグラ属貝殻による連続圧痕文が施され、57は区画を磨消している。興津Ⅱ式である。

SK10 (58～61)

58～60は田戸下層式である。58・59は太沈線で文様が構成され、胎土には微砂粒を多く含む。内面は縦位に良く磨かれる。60は口縁下に横位の平行沈線が巡らされ、内1本は太い沈線で、押し引き痕を有する。胎土は緻密で微砂粒を多く含む、外面は剝落が認められる。61は刻み帯を持ち、瘤状突起が付され、その頂部には貝殻による圧痕が加えられる。突起下には鋸歯状沈線が施され、内外面とも良く研磨される。田戸上層式に比定され、18に類似する資料である。

SK11 (62～68)

62～64は野島式に比定される。62は縦横斜位の微隆起線で文様が区画され、沈線で充填される。63は縦位に隆帯が垂下され、刻みが加えられる。内面に弱い条痕文を有する。64は口唇に刻みを有し、表裏に条痕文が加えられる。65は胴下半部で、太沈線が加えられる。66は細沈線による横位の平行沈線とその下に斜位の太沈線が施される。共に田戸下層式である。67は胎土が緻密で、表裏に条痕文が施される。早期後半。68は興津Ⅱ式に比定され、口縁部には条線帯が巡らされ、屈曲部には貝殻の圧痕と刺突が加えられる。

SK13 (69)

69は櫛歯状工具により曲線的な沈線が施される。前期後半の所産と思われる。

SK14 (70)

70は竹管状工具による沈線が施される。薄手で、内外面とも良く研磨され、黒い色調を呈することから、加曾利B2式と思われる。

SK16 (71～75)

71～74は田戸下層式に比定される。71は半載竹管状工具で沈線が施される。胎土は緻密で、微砂粒が多く含まれ、表面は橙色を呈する。72は櫛歯状工具による縦位の条線が施され、内面には縦位の磨き痕が認められる。73・74は同一個体で、太沈線による区画内は細沈線で充填される。内外面とも磨きが良好で、胎土は緻密で、微砂粒を多く含む。75は興津Ⅱ式で、楕円の区画を持つ磨消貝殻文で構成される。

SK17 (76・77)

76は田戸下層式で、横位の沈線と刻み帯で構成される。暗橙色を呈し、表裏の磨きは良好である。77は興津Ⅱ式の深鉢の口縁部で、半載竹管状工具による条線帯が施される。

SK20 (78)

78は田戸下層式で、横位の沈線の下に斜位の太沈線が施される。胎土は緻密で、微砂粒が多く含まれる。

SK21 (79)

79は興津Ⅱ式で、磨消貝殻文の磨消部に有節竹管文が渦巻き状に加えられる。外面は暗褐色、内面は褐色を呈し、内面は良く研磨されている。

SK22 (80)

80は田戸下層式で、細沈線による横位の沈線と、縦位矢羽状の太沈線で文様が構成される。胎土は緻密で、橙色粒子を多く含み、内面は縦位方向に良く研磨される。

SK30 (81・82)

81は波状貝殻文が施され、内面の調整は粗く、胎土に砂粒を多く含む。興津式に比定されよう。82は附加条LR+Rで、前期ころの所産と思われる。

SK33 (83)

83は半截竹管による彫りの深い集合沈線で、文様が構成される。胎土には微砂粒・金雲母を多く含み、外面は橙色、内面は黒色を呈する。前期末の所産と思われる。

SD 1 (84)

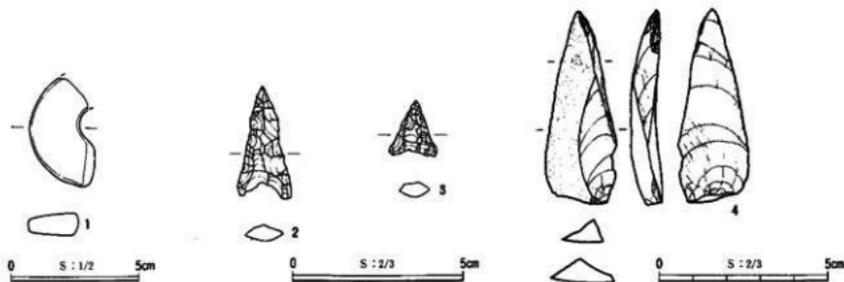
84は9本からなる櫛歯状工具による幾何学状の文様が施され、口唇には棒状工具による刻み加えられる。内面は丁重なナデが加えられ、胎土は緻密で、微砂粒が多く含まれる。田戸上層式に比定されると思われる。

遺構外の土器 (85~87)

85は口縁部がやや外反し、口端は面取りされている。口縁から斜位の沈線が平行して加えられ、内外面の磨きは良好で、胎土には微砂粒が多く含まれる。田戸下層式であろう。86は表面には斜位、内面には横位の条痕文が施され、口端に刻みを有する。野島式に比定されよう。87は半截竹管状工具により横位の平行沈線が施され、下位には曲線の文様が認められる。褐色を呈し、胎土は緻密で、微砂粒を多く含み、内面はナデ調整が加えられる。前期後半と思われる。

(イ) 土製品・石器 (第19図、図版17)

本遺跡で出土した土製品・石器は図示資料に限られる。1は土製袂状耳飾りで、1/3強の残存である。表面は橙色、裏面は暗褐色を呈し、共に若干凹凸を有する。2・3は石鏃で、2はチャート、3は黒曜石を石材としている。いずれも出土地点は明確ではない。4は安山岩を石材としたナイフ形石器である。



第19図 土製品・石製品実測図

3 古墳時代

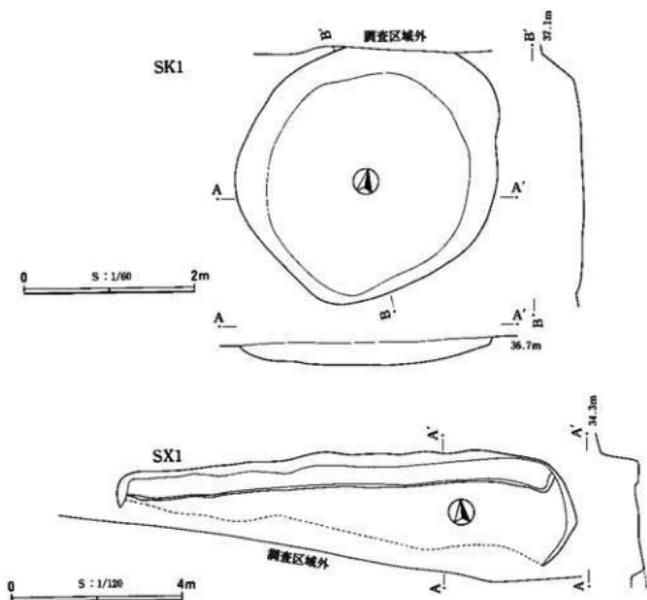
(1) 遺構

SK1 (第20図、図版9)

上端の北端部分がわずかに調査区域外に掛かっていた。平面形はほぼ円形で、規模は2.9m～3.3m、深さは0.28mである。壁面の立上りは緩やかで、床面はほぼ平坦である。覆土はローム粒をわずかに含む黒褐色土の単純層であった。床面に柱穴や炉などの掘込みは検出できなかった。一見すると縄文時代の小竪穴遺構のように見えるが、西側立上り部分の壁面に貼り付いた状態で、須恵器破片等が検出されており、古墳時代後期の土坑と考えて良いと思われる。

SX1 (第20図、図版12)

覆土上層には轍の痕跡と考えられる硬化層が細長く確認され、当初は道路状遺構としてのみ認識していた。しかし、掘り進んで行くにしたがって北側の壁面は直立となり、北側の一段溝状に下がった部分では床面からやや浮いた状態で土師器破等の破片が多数検出された。壁及び床面は成田層で砂質になっており、覆土も暗褐色の砂質土であった。規模は全長10.9mで、深さは平均0.8mである。床面は東から西に行くに従って幅が狭くなる。地形的な要因だけではなく、後世における斜面部分の成形成等も考えられるかも知れない。北側壁面直下の溝状の掘込みは下端幅0.4m～0.5m、床面からの深さは0.1mである。遺構の性格は特定できなかった。



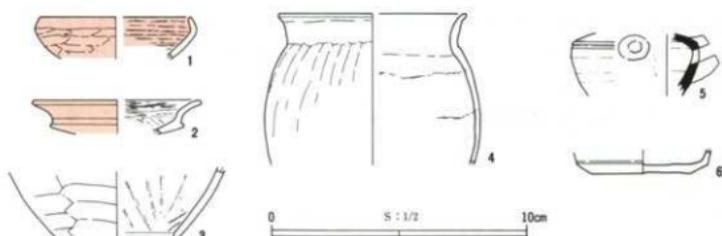
第20図 SK1・SX1実測図

(2) 遺物 (第21図、図版17)

1～4はSX1出土資料である。1は土師器杯である。内外面全面に赤彩が施されている。器肉の色調は乳橙色である。外面口縁部は横方向の指ナデ、底部は横方向のヘラケズリ、内面はヘラミガキで調整されている。胎土中に石英粒・酸化鉄粒をやや多めに含んでいる。焼成は普通である。2は土師器高杯の杯部破片資料である。外面に赤彩が施されている。内面は炭素吸着により黒色化している。胎土中に石英粒・酸化鉄粒をやや多めに含んでいる。外面は口縁部が横方向の指ナデ、体部が横方向のヘラケズリ、内面はヘラミガキによって調整されている。3は土師器甕の底部付近の破片資料である。色調は橙褐色で、外面の一部には黒斑がある。胎土中は外面に石英粒を多めに含んでいる。外面は横方向のヘラケズリ、内面はヘラミガキで調整している。4は土師器壺の上半部資料である。色調は淡褐色で、器肉は暗灰褐色である。胎土中に長石粒・石英粒・酸化鉄粒をやや多めに含む。器面はやや剝離が進んでいるが、焼成は全体に良い。内面全体から外面口縁部にかけては横方向の指ナデ、外面胴部は縦方向のヘラケズリ調整を行っている。

5はSK1出土の須恵器甕破片資料である。色調は青灰色で、外面上半の平坦部分に薄く自然釉が掛かっている。胎土中の混和物は極めて少なく、鉄粒をわずかに含むのみである。肩部に二条の沈線が巡っている。

6はB1-17グリッド出土のロクロ土師器杯である。色調は乳橙褐色で、胎土中に長石粒・酸化鉄粒を多く含み、器面はややざらついている。焼成は普通で、器面調整は外面底部が回転ヘラケズリ、それ以外はロクロナデである。唯一奈良時代のものである。



第21図 古墳時代・奈良時代遺物実測図

IV まとめ

1 木戸台・町原古墳群

旧石器時代

旧石器時代では、1文化層1ブロックが検出された。器種組成において利器（道具）が主体を占め、遺棄的色彩が強いブロックである。この文化層の特徴を列記すると、1）母岩は珪質頁岩が主体で、凝灰岩と砂岩が加わる構成である。2）器種は珪質頁岩、凝灰岩を石材とした中・大型石刃、小石刃、ナイフ形石器、彫刻刀形石器などで構成される。ナイフ形石器、彫刻刀形石器は石刃を素材としている。ナイフ形石器は槌状剥離面を持つ特異なものである。3）石器製作技術は本ブロックでの石器製作の痕跡は希薄であり、各器種がほかから搬入された状況である。各器種の観察からは石刃製作技法が存在し、小石刃を生産する技術が認められる。こうした技術構造を持つ文化層はVII層以降に当該地域で盛行するが、当地域ではIX層上部の検出例は見られず、槌状剥離面を持つナイフ形石器の存在を含めて、東北地方の同種の技術を持つ石器群との技術的な系統が考えられる。本遺跡の石器群は、こうした小石刃を剥離する技術を持つ石器群の純粋な表出形態の初源的な形を示している可能性がある。

縄文時代

縄文時代では早期後半と思われる伊穴が3基検出された。ほかには古墳縁辺部から後期・晩期の土器片が出土したのみである。

古墳時代

2基の古墳のわずかな部分の調査であるが、古墳の規模をほぼ正確に推定することができた。4号墳は墳丘規模で一辺17.5m、周溝外周で一辺26.5m、現墳丘頂比高で3.1mである。5号墳は墳丘規模で直径27.5m、周溝外周で直径41.5m、現墳丘比高2.8mである。また、4号墳から埴輪の小片がわずかに検出され、木戸台・町原古墳群を形成する周辺古墳の中に、埴輪を樹立した古墳が存在していたことを示唆している。

2 木戸台遺跡

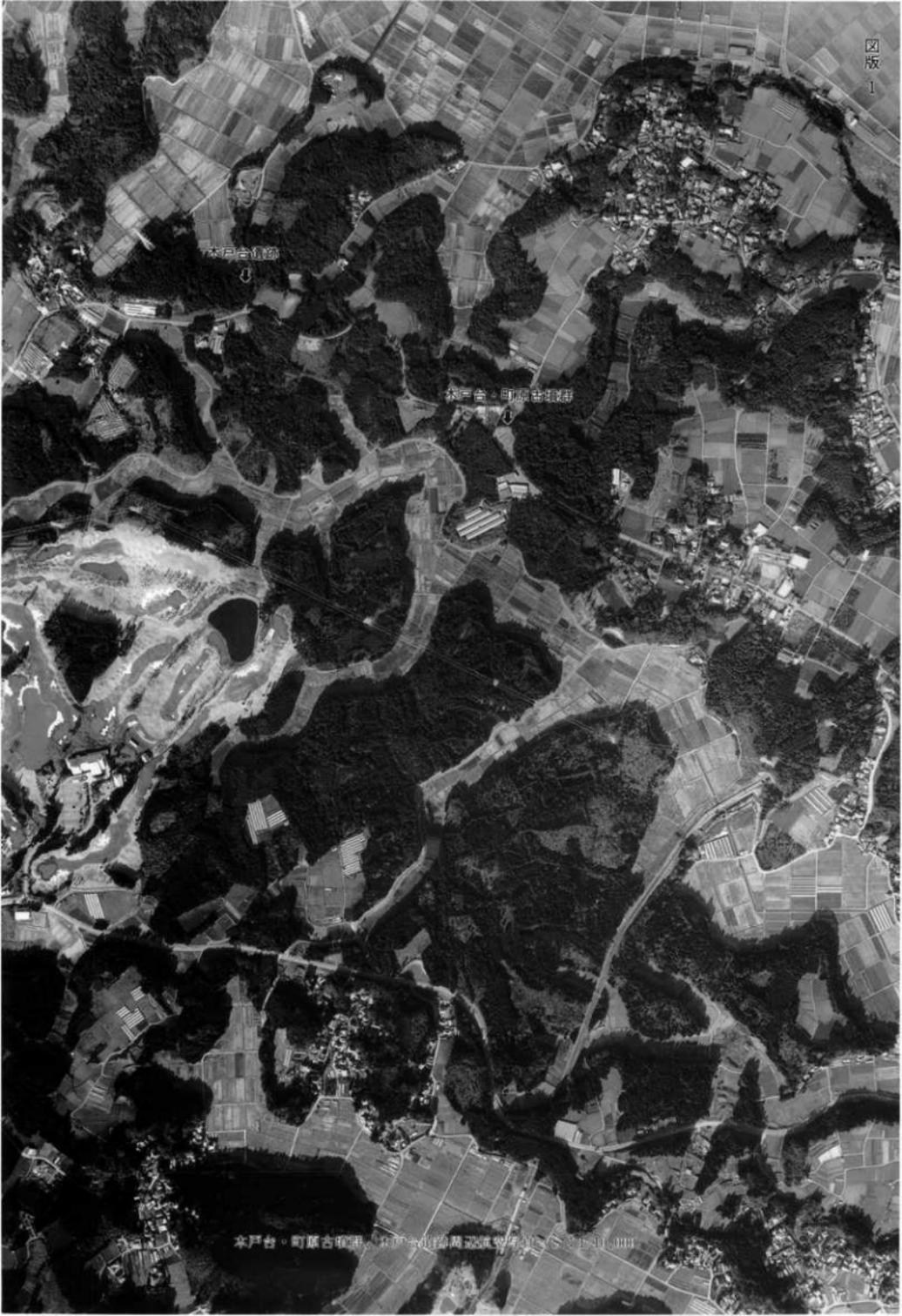
縄文時代

今回の調査では縄文時代の遺構として、竪穴住居跡1軒、土坑33基が検出された。竪穴住居跡からは田戸下層式から興津II式までの土器片が出土しており、時期を特定するには至らなかった。ほかの遺構も早期から前期の土器がほとんどで、この時期の所産と考えられる。土器は数量的に田戸下層式、野島式が卓越している。

古墳時代以降

古墳時代の遺物が検出されたのはSK1、SX1の2遺構のみである。ただし、馬の背状の台地の南側斜面の調査であるので、台地上端の平坦部にもう少し遺構が存在していた可能性がある。SK1は一見小竪穴状の遺構であり、該期の遺構としてはやや特異なものである。SX1は当初道路状遺構であると考えていた遺構であるが、性格不明である。

グリッド一括遺物であるが、奈良時代のクロロ土師器杯の破片が1点出土しており、やはり台地上端の平坦部に該期の遺構が存在していた可能性が考えられる。



1 本原台・山部

2 本原台・町原古和原

本原台・町原古和原、山部台の衛星写真(1975年11月)



遺跡全景航空写真



4号墳全景



5号墳全景



4号墳近景



4号墳調査状況(1)



4号墳調査状況(2)



4号墳墳丘土層断面



同（北西部分）



同（南東部分）



4号墳周溝
(北西側)



4号墳周溝
(南東側)



5号墳周溝



SK 1



SK 2・3



旧石器時代
遺物出土状況



1



2



3



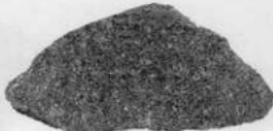
4



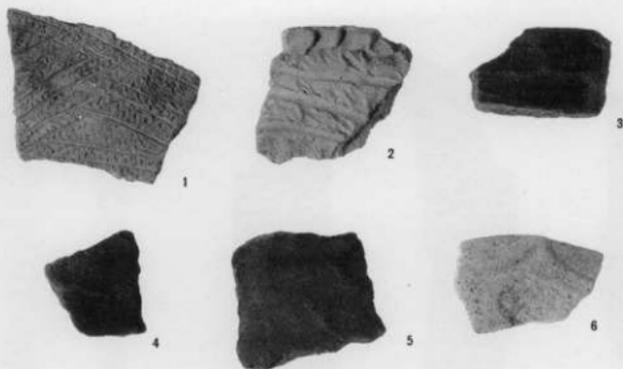
5



6



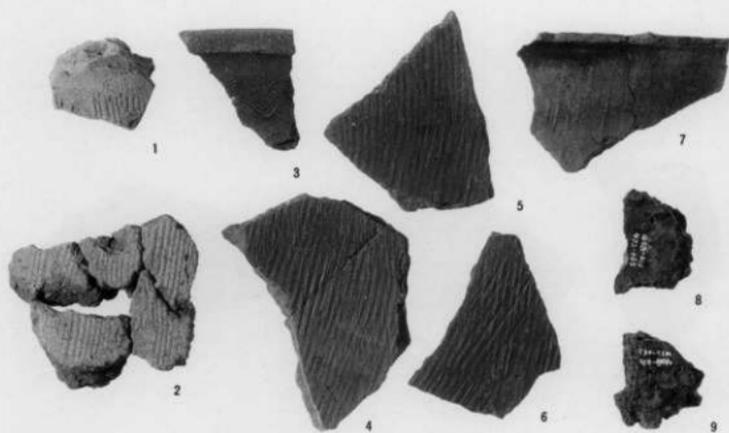
7



縄文土器



縄文時代石器



古墳時代遺物



遺跡全景
(西から)



同
(東から)



SK 1



SK 3



SK 2・4・5ほか



SK 7~11・20・37ほか



SK13・14・32・33ほか



SK22・23ほか



SK26・27



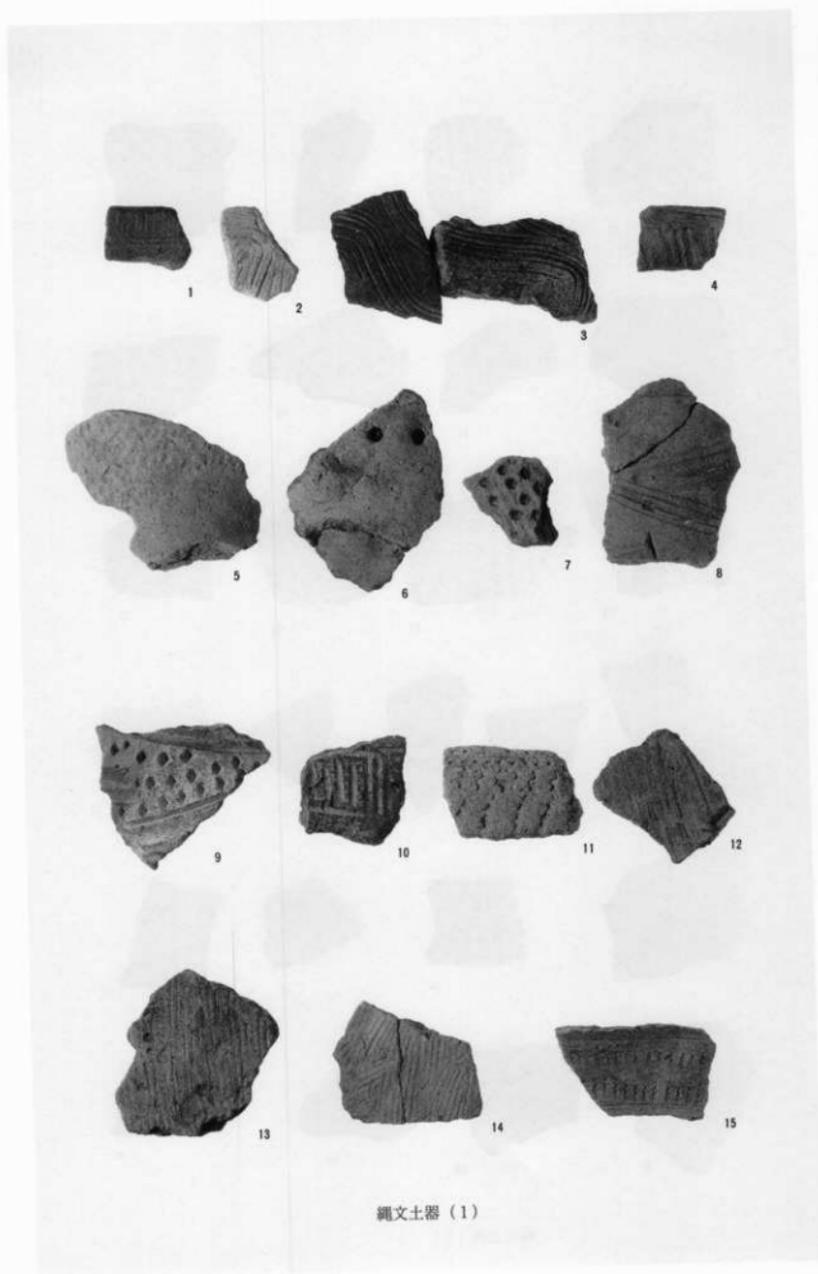
SK28~31



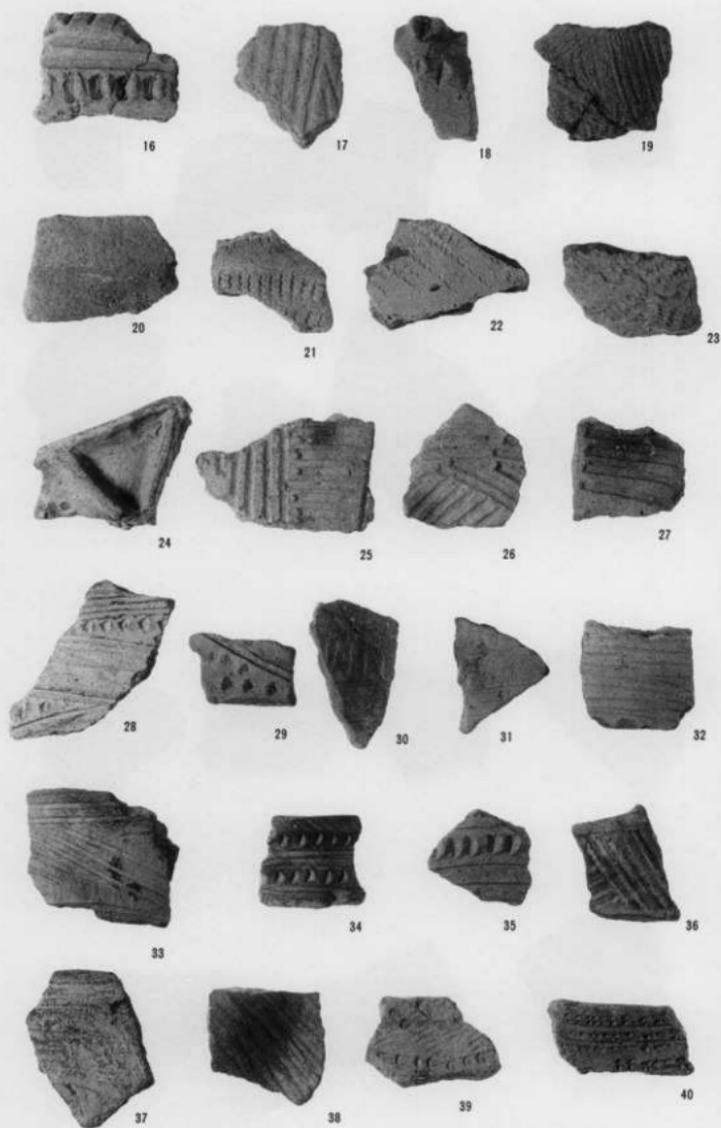
SK1・2ほか



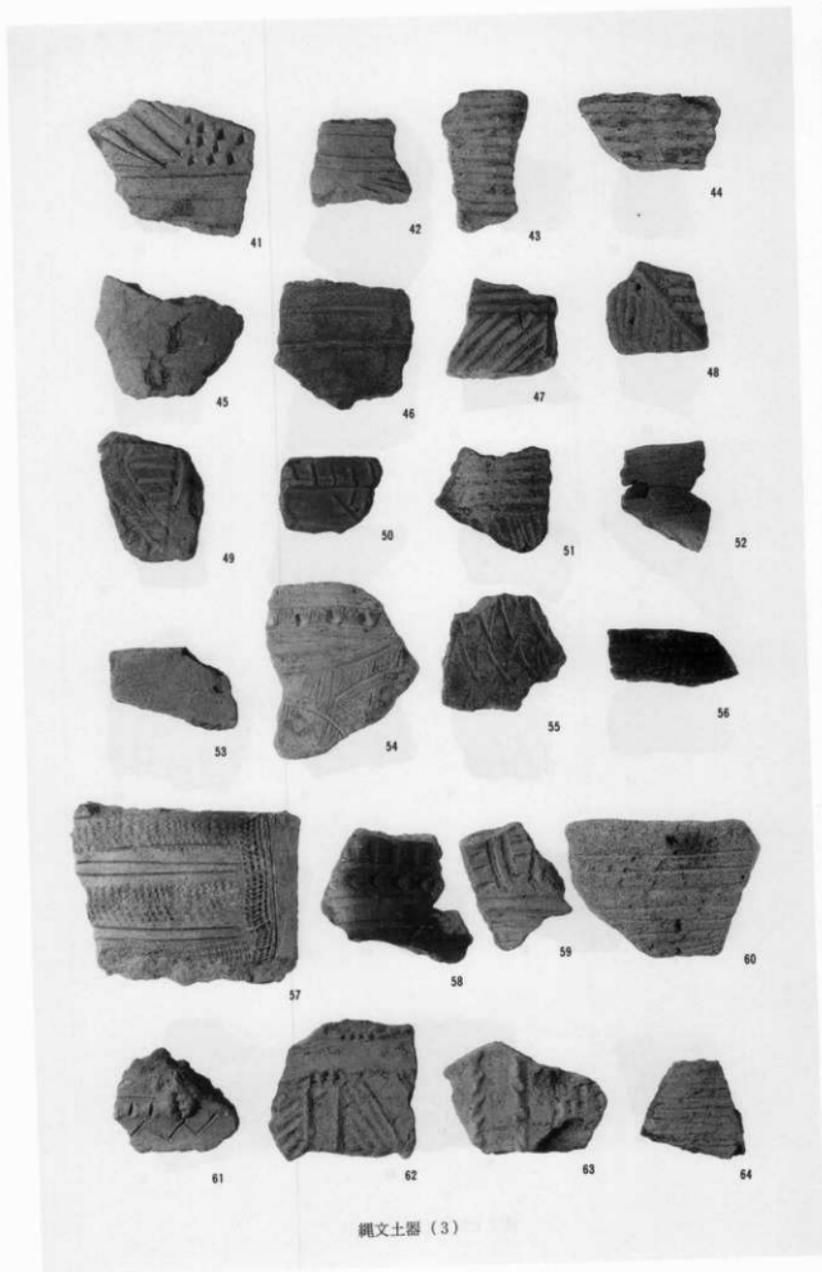
SX1



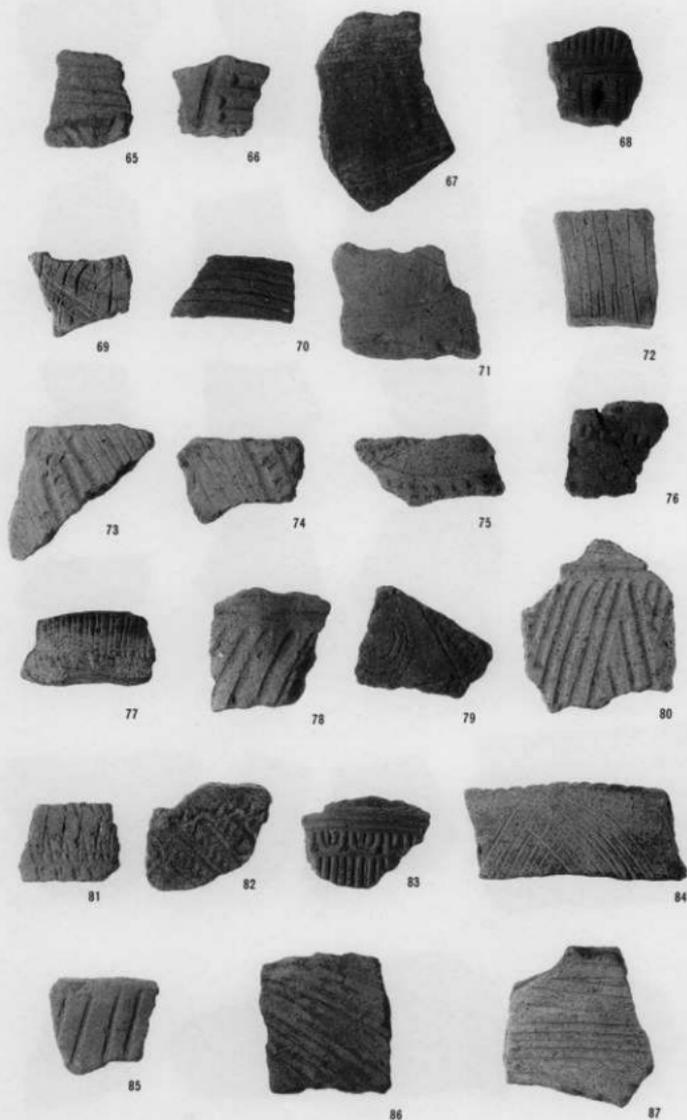
縄文土器 (1)



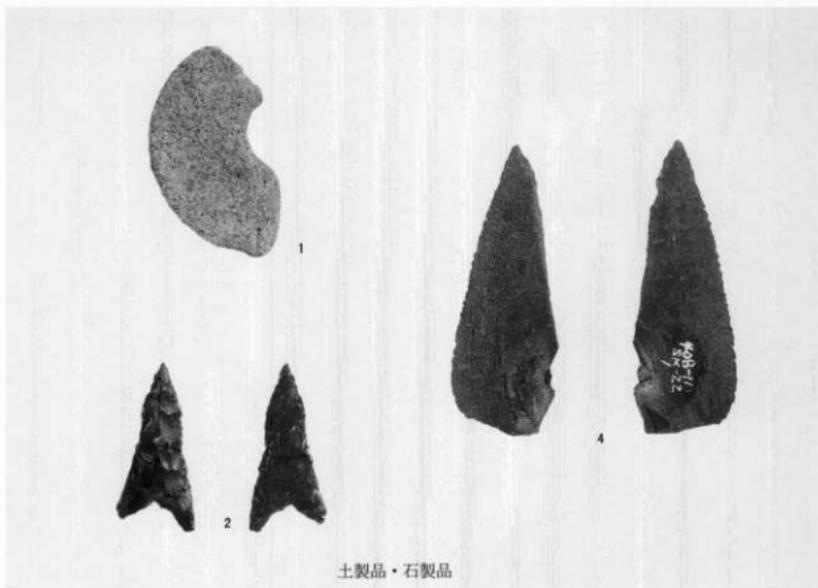
縄文土器 (2)



縄文土器 (3)



縄文土器 (4)



報告書抄録

ふりがな	いっばんけんどうよこしぼせんぶせんどうろかいりょうじぎょうまいせうふんかぎいちょうさほうこしょくしょ							
書名	一般県道横芝山武線道路改良事業埋蔵文化財調査報告書							
副書名	横芝町木戸台・町原古墳群、木戸台遺跡							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第284集							
編著者名	萩原恭一・高柳圭一							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2							
発行年月日	西暦1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きどがい まちはら 木戸台・町原 こふんぐん 古墳群	さんぶごんよこしぼまち 山武郡横芝町 きどがい たにべた 木戸台字谷部田 144-2 ほか	12408	010	35度 40分 42秒	140度 27分 24秒	19930601	380	道路改良 事業
						19930831		
						19950404 ? 19950414	53	道路改良 事業
きどがい いせき 木戸台遺跡	さんぶごんよこしぼまち 山武郡横芝町 なかだい とりいど 中台字鳥井戸 122-10 ほか	12408	011	35度 40分 51秒	140度 27分 2秒	19950410 ? 19950512	600	道路改良 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
木戸台・町原 古墳群	集落	旧石器時代	石器集中地点1か所	ナイフ形石器				
	古墳	縄文時代 古墳時代	炉穴 方墳1基 円墳1基	縄文土器（早期）、石器 埴輪、須恵器、土師器 鉄滓				
木戸台遺跡	集落	縄文時代	竪穴住居1軒 土坑33基	縄文土器（早期・前期） 土製块状耳飾り、石鏃、 石器				
		古墳時代	土坑2基	土師器・須恵器				

千葉県文化財センター調査報告第284集
一般県道横芝山武線道路改良事業埋蔵文化財調査報告書
横芝町 木戸台・町原古墳群、木戸台遺跡

平成8年3月29日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター
発 行 千 葉 県 土 木 部
千葉県中央区市場町1-1
財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2
印 刷 株式会社 正 文 社
千葉県中央区都町2-5-5
